Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol.46
2020

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Contents

■サンクトペテルブルグへ専門家派遣
■チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修
■韓国へ専門家派遣事業（セミナー）を実施しました
■韓国医師等の受入研修
■小中学校で出前講座を開催しました

長崎平和祈念式典にて

サンクトペテルブルグを訪問して

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長
川　上　　純

9月18日から23日まで、ナシムの専門家派遣事業として、ロシア連邦のサンクトペテルブルグの国立北西医科大学において開催された「北西医科大・長崎大・福島県立医科大との共同セミナー」へ出席しました。ナシムからは事務局の西さんと2名の派遣でしたが、長崎大学から原研国際の高村教授と長崎大学ベラルーシ拠点代表代行の高橋さんが同行し、福島県立医科大から和栗教授が参加され一行5名の参加となりました。

9月18日は午後6時55分発のANA便で上京し、羽田から日付が変わった深夜零時10分発のルフトハンザを利用しフランクフルトへ向かいました。ANAとルフトハンザが共同運航をしているため、長崎で預けたスーツケースはそのまま最終目的地のサンクトペテルブルグまで運ばれます。12時間半のフライトの後、フランクフルトに午前5時20分に到着し、4時間ほどラウンジで待機後、9時15分発のサンクトペテルブルグ行きの飛行機に乗換えます。3時間半ほどのフライトでサンクトペテルブルグへは現地時間の13時35分に到着しました。

私は初めてのロシア訪問でしたが、羽田から高橋さんに同行していただき、スムーズに入国することができました。空港には北西医科大から昨年の12月に長崎大学に派遣され、「放射線防護」の講義モジュールを受講した経験のあるマリーナさんに迎えに来ていただきました。大学の車が送迎用道路で待つ私たちのところに到着する直前に事故にあうというアクシデントがありましたが、代わりのタクシーでホテルまで案内していただきました。この日はホテルに入り、高村教授と和栗教授の到着をホテルにて待ちました。

ロシア2日目は午前中に北西医科大学を訪問しました。午前中は世界展開力強化事業コンソーシアム運営会議に参加しました。これは文部科学省の「世界展開力強化事業」に採択された「災害・被ばく医療科学分野におけるグローバル・リーダー育成プログラム」で、これから数年内に北西医科大・長崎大・福島県立医科大で共同のダブル・ディグリー修士課程を開設する計画となっています。そのためのプログラム内容や互換体制整備のための必要事項、計画実現のタイムラインなどが協議されました（3大学間の協議で、2021年の開講を目指すことになりました）。

世界展開力強化事業コンソーシアム運営会議

学食の特別室でのボリューミーなロシア料理の昼食の後、午後から今回の訪問のメインである「北西医科大・長崎大・福島県立医科大との共同セミナー」が開催されました。共同セミナーは「住民の健康保護～日露のイニシアチブ」というタイトルで、私と福島医科大の和栗教授、北西医科大学からプラビンスキー教授とゴンチャロフ教授が講演を行いました。

先ず、私が「長崎大学医歯薬学総合研究科におけるトランスレーショナル・リサーチ」と題して講演を行い、長崎大学の紹介、医学部の教育、医歯薬学総合研究科における研究について紹介しました。

福島県立医科大学の和栗先生は「リソソーム分解システムについての最新の研究」と題して講演されました。福島県立医科大の基礎医学研究の紹介ということで、ご自身の専門のリソソーム分解システムについての最新の研究の成果を紹介していただきました。

北西医科大のプラビンスキー教授は「研究におけるサンプルの抽出方法」と題して講演されました。プラビンスキー教授は今年 1 月に、長崎大学、福島県立医科大学から派遣された修士学生に「生物統計学」のモジュール講義を 8 日間にわたって行っていただいた先生です。長期のアメリカ留学を経験していらっしゃり、大変流暢な英語を話されます。

最後に極地医学研究の専門家で、南極にも派遣された経験を持つゴンチャロフ教授が「極地における感染症の分子疫学」とのテーマで講義されました。

講義セミナーは約 100 名の学生に聴講していただき盛会でした。

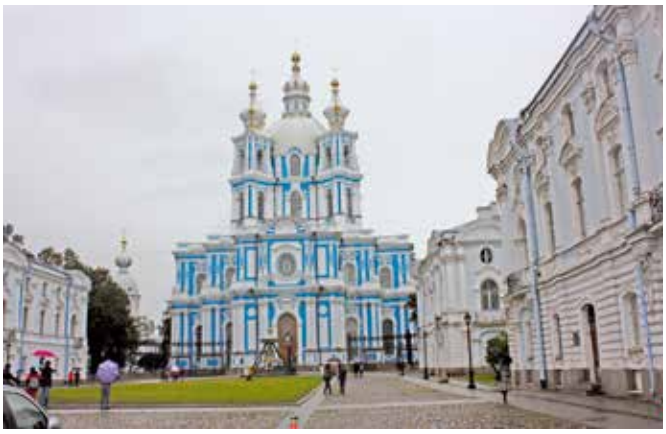
北西医科大・長崎大・福島県立医科大との共同セミナー

共同セミナー後、ホールでの記念撮影

共同セミナーの後も午前中のコンソーシアム運営会議で残された事項の打ち合わせを引き続き行い、ダブル・ディグリー・プログラム整備についての協議を行いました。結論が出ない箇所は各大学へ持ち帰り協議することとなりました。午前中の運営会議を含め、3 大学間の協議では非常に建設的な意見交換がなされたと実感します。帰国後の 10 月 16 日には「世界展開力強化事業」の中間評価を日本学術振興会で受けましたが、おかげで答弁をスムーズに進めることができました。

ロシア滞在 3 日目は、日露大学協会の総会へ参加するためモスクワに向かう高村教授、高橋さん、和栗教授と別れ、今年 10 月に福島の研修に参加する予定の学生の皆さんにサンクトペテルブルグ市内を案内していただきました。

サンクトペテルブルグは以前レニングラードと呼ばれ、1917 年までロシア帝国の首都でした。とても歴史の深い美しい町です。バルト海東端に位置し、ネヴァ川に沿って大きな建物が続いています。先ず市内東部のアスモーリヌイ女子修道院を訪問しました。エカテリーナ 2 世の時代には女子学校も開かれていたという優美なデザインの建物でした。



アスモーリヌイ女子修道院

イサク大聖堂

次に、血の上の救世主教会とロシア美術館、カザン大聖堂を案内していただきました。

この後、イサク大聖堂のドームの上に上り、悠か彼方に広がる市街を眺めました。

続いて、サンクトペテルブルグを作ったピョートル大帝がモデルとされる青銅の騎士像の前で記念写真を撮りました。

最後に、エルミタージュ美術館を案内していただきました。

エルミタージュ美術館は代々のロシア皇帝が収集した美術品が収蔵されており、世界三大美術館の一つに数えられています。

膨大な収蔵品を誇り、建物自体が世界遺産となっています。四つの建物から構成され複雑な構造となっており、とても 2 時間程度では見て回ることはできませんので、本館の主な展示品だけを早足で見て回りました。

中でも、イタリア美術のコレクションが有名で、とりわけダ・ヴィンチの 2 点の聖母子像ははずせませんが、世界中から鑑賞者が殺到して混雑しておりますので、図録を購入し、後でゆっくりと眺めることにしました。

翌日 22 日の午後 2 時 10 分発のルフトハンザ機でサンクトペテルブルグを出発し、往路と逆の行程でフランクフルトを経由し羽田空港へ飛びました。羽田空港で国際線から国内線へ移動し、予定より一便早い午後 4 時 10 分発の便に搭乗し、無事に長崎へ戻ったのは 23 日の午後 7 時過ぎでした。

ロシア滞在 4 日間のあわただしい旅でしたが、初めてのサンクトペテルブルグ訪問を有意義なものにしていただいた、北西医科大学の先生方及びご案内いただいた大学生の皆様にお礼申し上げます。

エルミタージュ美術館　内部

エルミタージュ美術館　外観

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修を実施しました。

ナシム森崎会長、長崎大学原研の高村教授と　（長崎県医師会館にて）

ナシムではチェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して、指導や医療情報提供を行うため、医師等の研修生を受け入れています。今年も６名の医師等を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は７月 15 日から８月 16 日まで長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者との交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、平和祈念式典への参列など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについても理解を深めました。

【日程概要】

７／15	長崎へ到着
７／16～８／１	関係先訪問・見学、長崎大学での共通研修
８／２～15	長崎大学（病院）等での専門研修
８／16	帰国のため長崎出発

【研修生名簿】

1. ポリキン ビャチェスラフ　（ロシア）国立医学研究放射線センター付属ツィーブ医学放射線研究センター 主任
2. サイコ アレクセイ　（ウクライナ）州立コロステン市広域診断センター 超音波診断部門 医師
3. パボイネウ ビクトル　（ベラルーシ）ベラルーシ国立医科大学 生化学研究分野 研究員
4. ミツーラ ビクトル　（ベラルーシ）ゴメリ医科大学 感染症講座長･診断学部長
5. サメターエフ ダルハン　（カザフスタン）セメイ核医学･がんセンター 内視鏡医師
6. カイルバーエフ ムラット（カザフスタン）婦人科腫瘍院長

Polkin Viacheslav（ポリキン・ビャチェスラフ）

国立医学研究放射線センター付属ツィーブ医学放射線研究センター　主任

NASHIM の 2019 年のプログラムによって私は日本初訪問が叶い、放射線安全性に関する研修を受けることができた。NASHIM 研修は 2019 年 7 月 16 日に開始され 8 月 15 日に修了した。休日・祝日を除くと研修期間は 21 日間である。研修は 2 つのパートに分かれていた。一つには座学が充てられ、二つ目のパートでは長崎大学病院、長崎国立医療センター、分子疫学研究室との共同研究が行われた。

私が聴講した講義は大変興味深くまた、今の局面に則したものであった。研修中私は第二次世界大戦下の日本への原爆投下による身体的･精神的な影響に関して知り得ることとなった。それは、放射線防護策、甲状腺がんの問題、分子・遺伝子レベルで及ぼされる放射線の影響などに関するものであった。自然災害がもたらした福島原子力発電所の事故に関することも紹介された。講師の方々が福島の被災者たちへ支援を行う自らの活動について、放射線影響を減少させるための長年の知見をいかに活用してきたかということを語ってくださった。チェルノブイリ原発事故また福島の教訓をもとに放射線汚染を回避するための情報がもたらされた。私はすべての講師の方々に感謝の意を表したい。数カ所の被爆者が検診に訪れる医療施設の訪問をした。そこで、医療支援の制度を紹介された。あのような悲劇を生き延びた方達の健康維持への大変な手厚さに強い感銘を受けた。また、長崎の原爆を経験した方達と面会もさせていただいた。この出会いは一生記憶に残るであろう。この美しい長崎の町がかつて根こそぎ破壊されたことがあったとは想像し難い。私は日本人の強さに感動を覚える。1945 年の 8 月 6 日と 9 日に起こったことは、もう二度と繰り返されてはならない。また、長崎大学原爆後障害医療研究所の分子疫学研究室との共同研究に参加することができた。これは大きな経験となった。私は、担当教員であるウラジミール・サエンコ教授とタチアナ・ログーノビチ女史に支援を感謝したい。研修オーガナイザーに衷心よりの感謝を表明する。宿泊、休日、研修、施設など全てが大変よく考察されたオーガナイズであった。私は研修で得た知識を自身のこれからの仕事に活用し、ロシアの同僚たちとシェアしていきたい。日本の皆さんは私に忘れがたい印象をもたらしてくれた。私は多くの国を訪問したが、このような偉大で温厚な民族を見たことはかつてなかった。心からまた日本を訪問する機会があることを願う。更なる友情を重ねるためにできることをすべて行ってまいりたい。

放射線影響研究所にて

Saiko Oleksii（サイコ・アレクセイ）

ウクライナ ジトミール州立コロステン市広域診断センター 超音波診断部門　医師

先ず、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の皆さま、特に森崎会長、高村教授には、日本、特に長崎への招聘に心より御礼申し上げます。そして、ご自身の研究分野に関する講義をしてくださった講師の皆様に感謝申し上げます。

ウクライナ、ベラルーシ、カザフスタン、ロシアの専門家が研修する当該プログラムは大変有益であり効果の高いものであること、私たちが日本の専門家から得た知識は、これからの私たちの実際の業務に大変役立つものであるということを申し上げたいと思います。見聞したことの全てを医療現場の同僚である医師たちに伝えてまいります。

私は、NASHIM 研修は二度目ですが、自身の経験からも、この研修から学んだことはチェルノブイリ原発事故の影響に苦しむ方達への支援をするという私の仕事を大いに助けてくれるものであり、長崎大学の専門家と協力して 1991 年から現在に至るまで続く様々なプロジェクトにおいて有益な知識を得られたと、言うことができます。

これからも、全ての医療分野の知識を獲得していくという意味で、我々医師らの更なる協力に寄与するであろうこのプログラムを拡大していくべきでありましょう。

研修以外の自由時間に、長崎やその周辺の名所に案内をしてくださり、余暇を過ごすことにご助力くださった皆様に御礼を申し上げます。

再度このプログラムの実現のためにご精励くださったオーガナイザーに対し、また、私たちが温かい陽光降り注ぐこの国で出会った日本の皆さまの細やかな心配りに対して御礼を申し上げます。

Paboineu Viktar（パボイネウ・ビクトル）

ベラルーシ国立医科大学　生化学研究分野　研究員

1945 年、全世界の人々が今日においても無関心ではいられない爪痕を残した 2 つの悲惨な出来事が起こりました。1945 年 8 月 9 日の長崎原爆の日は、日本だけでなく、何十億もの人々の記憶に留められたのです。179,226 人もの人がこの惨事の犠牲者となりました。この巨大な数の中に犠牲者の近親者は含まれませんが、放射線の直接障害は受けていないとしても、彼らは大きな心理的な衝撃を受けたのです。1986 年 4 月 26 日と 2011 年 3 月 11 日という悲惨な日も世界中の知るところとなりました。この

2 つの出来事は平和利用目的で使用される原子力のエネルギーがもたらしたという観点から大変重要です。

放射能の発見から 100 年以上が経過し、今日では人類による小規模、中規模の放射線源の利用は既に習慣的なものとなっています。近代的放射線医療は多くの人々が命を保つことを支援するものです。しかし原子力に対する恐怖は 2011 年福島原子力発電所の事故によってさらに社会に強く認識されるようになりました。

このようにして、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）の事業の大きな意義が明らかになったのです。毎年ナシムはベラルーシ、ロシア、ウクライナ、カザフスタンを含む多くの国から専門家を招聘しています。森崎正幸ナシム会長からの招聘を私は喜んでお受けしました。研修参加は、日本へ飛び立つまでの必要な書類を提示し、私の疑問に答えてくれた高橋順平氏の尽力なしには実現しませんでした。研修は高村昇教授のオリエンテーションから始まりました。ナシムの活動、長崎大学の機構を知り、長崎での全研修日程の心構えを得ました。研修の間、原爆の被害を受けた方たちの健康管理、チェルノブイリ原発事故、福島原発事故の影響の講義を聴講しました。また、放射線生物学、ヒトゲノムの研究メソッドの重要性にも光があてられました。講義の一部は当然、大人と子供に発生する甲状腺がんの問題もあり、骨髄移植、幹細胞移植、人体の病理診断の近代的なアプローチなどもお聞きしました。多様なテーマの講義を聴き衝撃を受けた事実は、分子レベルからの総合的な放射線影響への理解が成されているということでした。分子生物学、生物化学に携わる私にとっては大変重要なことでした。講義テーマの強い相互関係を立証したのは柴田義貞教授の疫学研究の講義でした。

私たちの研修とテーマの重要性は、私たち代表団を長崎県知事、市長、医療施設、社会福祉団体のリーダーや、臨床医師の方たちが受け入れてくださったことでも証明されていると思います。私たちの研修プログラムには原爆資料館、原爆死没者追悼平和祈念館の訪問も含まれていました。この訪問は、全ての訪問者がそうであるように私にとっても生涯記憶に残るものとなりました。資料館には長崎市に炸裂した原爆とその出来事にまつわることが展示されていました。資料館内には聖堂の遺物、文書、そして長崎への原爆投下に関するビデオもありました。それらすべては原子爆弾の威力を想像するに難くないものでした。核兵器がもたらす残酷さを余すことなく内外に広めていくために大変重要です。この資料館の訪問が、二度とこのような原子爆弾を使用してはならないと肝に銘じる大きなきっかけを与えています。この資料館開設の経緯が展示に強く反映されていました。

研修の後半は個別の専門研修に充てられました。私は原爆後障害医療研究所の遺伝学研究室で実習を受けました。私の担当教官の三嶋博之博士、また、同研究室長の吉浦孝一郎教授に感謝の意を表します。この研究室で過ごした期間内で、私はベラルーシ側、日本側によって実施されるプロジェクトを審議し、多くの問題を話し合いました。新世代シーケンサー Illumina HiSeq 2500 も紹介していただきました。

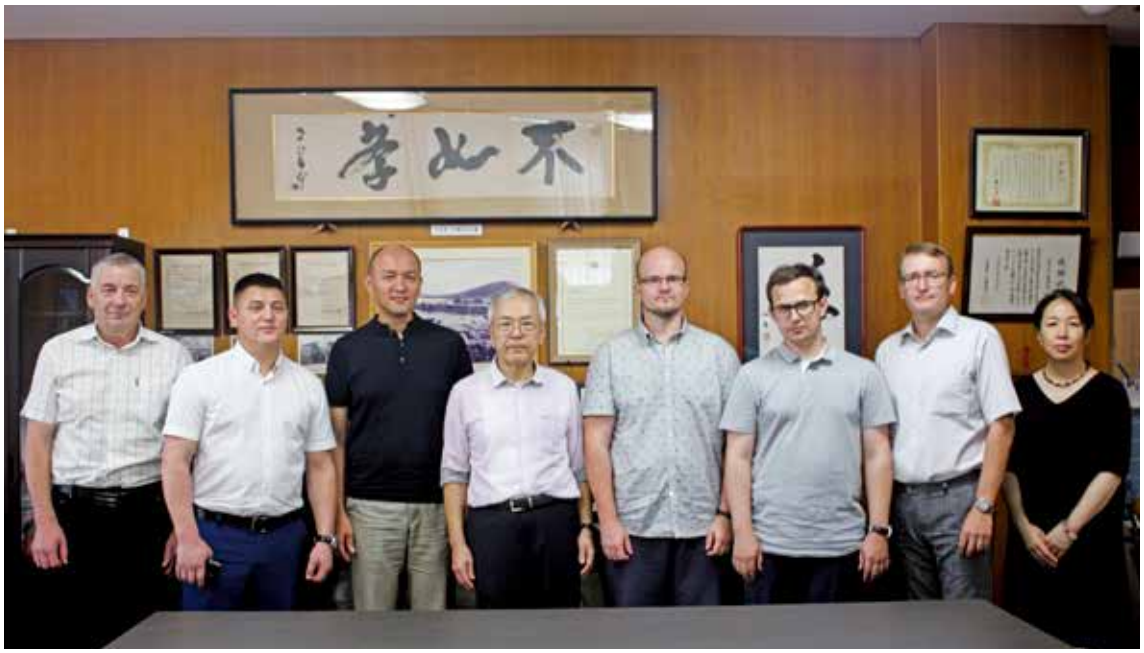
研修オーガナイザーのご尽力で 8 月 9 日の長崎被爆 74 周年平和式典にも参加することができました。1945 年の原爆を生き延びた被爆者と触れあうこともできました。

講義後の時間や休日に長崎の歴史や文化を詳しく知る機会もありました。市内を散策し、74 年前にこの町が原爆を経験したとは信じられない思いがありました。宿泊先からほど近い場所に在る長崎県立歴史博物館はこの町の歴史を伝え守り続けています。長崎は長年、鎖国された日本で唯一の国際貿易の港でした。この記憶を留める博物館にはスペイン、ポルトガルからの素晴らしいコレクションが陳列されていました。それは長崎港を通して世界との関係を保っていた江戸時代の日本が目にしていたものなのです。長崎滞在中に港祭りがあり日本人が夏を楽しむ姿を見ることができました。

最後にもう一度ナシムの幹部の方たちに日本訪問と長崎大学原爆後障害医療研究所の代表的な専門家

の講義を聴講する素晴らしい機会を頂いたこと、専門研修の機会に深い感謝の意を表します。研修で得た知識を私の研究活動にも、ベラルーシ国立医科大学の生徒の教育にも活かしてまいります。研究成果を私たちと分かち合ってくださった講師の皆さんに心から感謝します。また研修中日本語で行われた講義の通訳をしてくださった竪山洋子さんには、日本の文化を紹介してくださったことに感謝いたします。

町を再建しただけでなく、多くの国との関係を発展させてきた長崎県民の方達の勤勉さに触れておきたいと思います。全体として、長崎滞在は私に多くの新しい知見をもたらし、鮮やかで忘れがたい印象を、一生涯持ち続けるとことになるでしょう。



長崎大学河野学長と

Mitsura Viktar（ミツーラ・ビクトル）

ゴメリ医科大学　感染症講座長・診断学部長

毎年、ゴメリ医科大学の職員が NASHIM の研修プログラムに参加しています。歴代の参加者が温い気持ちと感謝で長崎で過ごした時間を回想しています。ゴメリ医科大学は 1990 年にチェルノブイリ原発事故の被害地域で活動する医師の養成のために開設されました。大学の職員は汚染地域の患者の健康診断や治療に参加し、また、人体への放射線の健康影響に関する研究を行っています。この活動に大きな支援をしてくださっているのが日本の皆さん、特に長崎大学の専門家の皆さんです。両大学間の協力関係は教

員・学生交流という形で広がっています。

2019 年には、ナシム研修に参加するため長崎に行くという幸運が私に訪れました。来日は初めてでした。そして、私自身にとって多くの新しいこと、通常とは異なることを見聞しました。この国は多くの自然災害や原爆を経験したにもかかわらず、強靭さを保ち、繁栄し続け、素晴らしい業績をもって世界を驚愕させています。長崎は、大変美しいそして清潔な町です。市民は、礼儀正しく、愛想が良く、親切です。

本研修の参加者達は、長崎県知事、長崎市長と会見する機会を得ました。この指導者たちは、地域の整備と繁栄のために多くのことをしています。私たちが訪問した医療施設の責任者らと同様に、関心を持ち、善意で対応してくださいました。

座学の際には日本を代表する専門家の方たちが、1945 年に起きた長崎原爆投下に関するデータ、被爆の医学的影響、被爆者医療や社会保障の制度などを紹介してくださいました。特に、関心を持ったのは、原爆後の影響とチェルノブイリ・福島の原発事故の影響の比較でした。甲状腺がんや他の腫瘍また、近代的な診断や治療に関してたくさんの新しい知識を得ることができました。

長崎原爆資料館の訪問で私たちは原爆の恐怖の全貌を理解し感じることができました。9 日の平和祈念式典は強い印象をもたらしました。原爆は二度と繰り返させてはなりません。そのためにヒロシマとナガサキの教訓を覚えておかなくてはならないのです。

ナシム研修の実習の際には、大学病院で私は感染症の医師の同僚の皆さんの仕事を視察させていただき、医療関係者の教育の制度にも触れることができました。感染症コントロールチームの業務、微生物ラボの潜在力、熱帯医学研究所の活動、消化器外科、胆肝膵外科の業務にも触れることができました。ご多忙ながら感染症や熱帯地域病の豊富な治療経験と教授経験をシェアしてくださり、温かい仲間意識で接してくださった有吉紅也教授、高橋健介医師、全ての感染症内科の皆さんに感謝の意を表します。熱帯医学研究所との学術協力の展望を持っております。

ナシム研修のオーガナイザーである、この研修を組織し実施してくださった森崎正幸会長、高村昇教授をはじめとする日本のパートナーの皆さんに感謝申し上げます。また、通訳の竪山洋子さんにも研修への適応や文化体験への支援ありがとうございました。

日本で得た知識をゴメリ医科大学の職員、指導部、同僚、学生へ伝えてまいります。

Sametayev Darkhan（サメターエフ・ダルハン）

セメイ 核医学・がんセンター　内視鏡医師

2019 年 7 月 16 日から 8 月 15 日私は NASIM の研修プログラムに参加し座学と大学病院での実習をしました。私はかねてから日本を訪れたいと思っていました。ナシムの研修によって日本への素晴らしい訪問が叶い、研修を受けることができました。

日本の内視鏡技術は高水準にあるので、内視鏡医は日本での研修を受けるべきであると考えます。心よ

りナシムに対してこのようなまたとない機会を与えてくださったことに感謝いたします。

一週目は、長崎県知事、長崎市長を表敬、また、長崎大学学長、ナシム会長など各機関の指導部を訪問し、大変温かい歓迎を受けました。

印象深い訪問の一つとなったのは、原爆ホームでした。原爆被爆者の方達との出会いは一生忘れることのないものとなりました。このような惨事を絶対に二度と繰り返してはならないと思います。座学では、甲状腺がんの問題とそれに関する見解、放射線医学、広島・長崎の原爆、また福島原発事故の人体影響について聴講しました。

最後の２週間は実習として長崎大学病院の光学医療診療部で研修を受けました。この部門の内視鏡医の方々は日本でも有数の上部・下部消化器官の内視鏡診断・治療のスペシャリストの方々です。内視鏡室でのすべてに感動しました。業務のプロセス、スタッフの落ち着いた様子、それは、大変シリアスな施術をする際でも変わらずに、最高のプロフェッショナルな専門家のパフォーマンスを目にしました。もちろん、内視鏡やビデオスコープの最新設備に感服しました。一日に３－４件の剥離術が行われていました。いくつかの内視鏡室で並行して ESD/EMR//EUS-FNA、胆肝膵の造影術（ECRP）や、気管支鏡下の手術 EUS-TBNA も行われていました。

受け入れてくださった同僚の皆さんには、私の質問に答えてくださったことを感謝します。

８月９日、平和祈念像がある平和公園で行われた平和式典に参加しました。黙とう、献花が行われました。日本の首相も参加していました。この恐ろしい悲劇は私の心に深く突き刺さりました。

長崎市は、とても美しく整然としており、市民の皆さんは善意にあふれ、あらゆる場所で秩序が保たれていました。

ナシム研修のオーガナイザーに心から感謝いたします。

日本は素晴らしい国です。永遠に繁栄し、そして、世界が平和でありますように。

Kairbayev Murat（カイルバーエフ・ムラット）

カザフスタン　婦人科腫瘍院長

何よりもまず参加者候補として審査をしていただきましたことを感謝申し上げます。私は、NASHIM の活動やどこよりも長く続くコホート研究などを含む自身にとって多くの新しいことを見聞させていただきました。

講義の際、私たちは被爆者、原子爆弾の早期の影響、爆心地からの距離による影響の研究に関してより詳しく知ることができました。ナシムの活動に関して、また長崎大学また原爆後障害医療研究所の組織に関しての高村昇教授のオリエンテーションが大変興味深かったです。

横田賢一教授が人体に及ぼす直接・間接影響を引き起こす放射線病や被爆距離の影響に関してお話しくださいました。基礎科学としての鈴木啓司准教授の DNA 損傷、細胞サイクル、そしてその放射線被ばく影響に関する講義がとても印象深く残りました。

実験での様々な放射線量による細胞損傷を観察する実験が大変関心を引きました。

同様に、吉浦教授の遺伝学に関する講義、高村昇教授のチェルノブイリと福島の原発事故の比較を、素晴らしかった講義としてあげます。常時モニタリングを実施し、事故後の市民の被曝をコントロールするという目的での福島県内に常駐事務所を開設などのアプローチが特に感銘を受けました。また、山下教授の原子力事故と甲状腺がんの関係に関する講義も興味深かったです。

放射線の健康への総合的な影響に関して中島教授が講義をしてくださいました。（急性・慢性の影響）様々な内臓器官と組織が放射線耐性をどれくらい持っているかということに言及がありました。教授の提示されたスライド（組織片のガラス標本）が大変興味深かったです。

サエンコ教授は同様に、のちに福島で活かされることになるチェルノブイリの研究の経験を私たちにシェアしてくださいました。これは研究結果が別の事故に活かされる、また有益であるということの素晴らしい手本であります。

宮﨑教授の血液疾病（血液腫瘍学）の講義は理論的で関心深かったです。

柴田義貞教授の講義、李桃生教授の幹細胞講義をあげないわけにはいきません。

全ての講義が大変興味深く、講師の皆さんは、素晴らしい講義をしてくださいました。印刷されたスライド、全ての参加者が英語を理解しているわけではなかったので講師が日本語で講義をし、日本語からロシア語への通訳がありました。

病院での実習は大変有意義でした。歓迎をしていただき友好的でした。

研修プログラムは大変よいバランスでした。最初の２週間は様々なテーマで講義を聴講しました。オーガナイザーは余暇も楽しく過ごせるように提案をしてくれました。個別に竪山洋子通訳に感謝します。講義だけでなく大学外での時間も助力いただきました。

ナシム研修の更なる発展をご祈念いたします。

中村知事、ナシム森崎会長と　長崎県庁にて

韓国専門家派遣事業（セミナー）に参加して

長崎大学　原爆後障害医療研究所　所長　**宮﨑　泰司**

9月1日から2日まで、韓国の大邱（テグ）広域市にある啓明（ゲミョン）大学の東山（ドンサン）病院で開催されたナシム主催のヒバクシャ医療セミナーに講師として参加しました。もう一名の講師の永山雄二先生とナシム事務局の西さんと訪問しましたが、この顔ぶれは仁川（インチョン）赤十字病院でのセミナー以来3年ぶりです。大邱広域市へは福岡空港より直行便が出ていますが、当初予定していた午後1時30分発のアシアナ航空便が出発日の5日前に運行取りやめとなり、急遽午後7時半発のTW便に変更したため、大邱入りは夕方9時過ぎとなり、ホテルへは午後9時半頃にチェックインすることとなりました。

2日目、ホテルのフロントで我々4名に大韓赤十字社のチーム長の方（バン）・千基（チョンギ）さんと担当の梁（ヤン）・信恵（シンヒェ）さんが合流され、本日の会場である啓明大学東山病院へ向かいました。

啓明大学は創立120年となるカトリック系の大学で、病院は4度目の建設だそうです。

病院は1300床を誇る国内でも大きな病院で、昨年新しい病院が完成したばかりです。

東山病院は昨年から大韓赤十字社の協力病院となったことから、今回初めてセミナーを開催することとなりました。

先ず、院長先生にご挨拶に伺いました。院長のジョ・チフム先生は本日より院長に就任したとのことで、手術の合間にお会いすることができました。先生は産婦人科の医師で、ダ・ヴィンチ手術で国内でも有名な医師とのことでした。

挨拶の後、病院内を見学させていただきましたが、20階建ての病院は、昨年完成したばかりで、どこも新しく、まず、屋上のヘリポートから見せていただきました。

この後、特別病室や19階の国際会議室を案内していただきました。国際会議室は4ヶ国語対応が可能とのことでした。

ヒバクシャ医療セミナーは12時30分より1時間に渡って行われました。食事をしながらのランチョンセミナーです。受講者は40人分の席を用意しましたが、ほぼ満席でした。

先ず私が「放射線誘発造血器疾患−長期影響」と題して原爆被爆者に見られる放射線の長期影響について講演しました。次に永山先生が「放射線誘発甲状腺がん−長崎・広島、チェルノブイリ、福島の比較」と題して福島原発事故への対応やその影響について講演されました。

講演は英語で行いましたが、講演のスライドには韓国語のコメントをいれ、少しでも理解が進むよう工夫しました。

参加者の皆さんはほとんどが医師で、熱心に聴講していただきました。

講演後の質疑応答では次のような質疑が出されました。

「被爆した患者のためのフォローのためのガイドラインはあるか」

「喫煙を介したガンの発生への影響は」
「高線量被爆と低線量被爆ではどちらが有害か」
　今回は市内視察の時間がなく、空港と宿舎とセミナー会場を移動しただけでしたので、市内の様子もあまり見ることができませんでしたが、タクシーの運転手さんは「日本からの航空便が減ったことで、観光のお客さんが減ってしまった。早く、今度の混乱が解消して、また日本からの観光客にきてほしい。そうでなければ私たちの日々の稼ぎにすぐ影響するから。」と話していました。

啓明大学東山病院のランチョンセミナー

　最後になりましたが、セミナー開催にあたってご尽力いただきました啓明大学東山病院の皆様、大韓赤十字社の皆様にお礼申し上げます。

出前講座

長崎市で出前講座を開催しました。

　NASHIM でこれまでに培ってきた「ヒバクシャ医療の国際協力」や「放射線被ばく医療」等について、長崎の小中学校生の皆様にわかりやすく説明することにより、生徒たちの科学や医療への興味・関心を促し、放射線医療科学を通じた国際貢献に寄与する後継者の育成につなげるため、長崎大学の先生方が小中学校を訪れて講義を行います。

長崎市立長崎中学校にて

　今年の第 1 回は 7 月 1 日に長崎市立長崎中学校で出前講座を開催しました。2 年生 60 名を対象として、長崎大学の松田尚樹先生が、「放射線って何？測ってみよう放射線」と題して 1 時間の講義を行いました。
　第 2 回は 7 月 4 日に長崎市立三和中学校の 1 年生 73 名を対象に開催しました。前回と同様に松田尚樹先生が、「放射線って何？測ってみよう放射線」と題して 1 時間の講義を行いました。
　さらに第 3 回は 7 月 12 日に長崎市立山里中学校において 2 年生 172 名を対象に開催しました。
　三根眞理子先生が、「長崎原爆の話・長崎原爆被爆者のこころの調査」と題して 50 分の講義を行いました。
　出前講座開催に際しては、機材の準備等でお手数をおかけした先生方と参加していただいた生徒の皆さん、ありがとうございました。

長崎市立山里中学校にて

韓国医師等の受入研修事業

韓国医師等の受入研修を 10 月と 1 月に行いました。

第 1 回　令和元年 10 月 6 日～ 10 日

【日程概要】

10／6　長崎へ到着
10／7～9　関係先訪問･見学、長崎大学での講義
10／10　長崎より帰国

【研修生名簿】

①金　德潤　慶熙大学病院　医師
②李　愛京　仁川赤十字病院　看護師
③崔　蘭珠　尚州赤十字病院　看護師
④洪　水蓮　統営赤十字病院　看護師
⑤朴　栽漢　韓国原子力医学院　行政職
⑥南　玄錫　韓国原子力医学院　行政職
⑦金　成佶　韓国原子力安全保障委員会
⑧成　相根　東国大学慶州病院　放射線技師

原爆資料館前

第 2 回　令和 2 年 1 月 13 日～ 17 日

【日程概要】

1／13　長崎へ到着
1／14～16　関係先訪問･見学、長崎大学での講義
1／17　長崎より帰国

【研修生名簿】

①李　永熙　ソウル赤十字病院　看護師
②趙　英銀　仁川赤十字病院　看護師
③金　途熙　統營赤十字病院　看護師
④金　美仙　尚州赤十字病院　看護師
⑤李　貴子　嶺南大学病院　看護師
⑥鄭　明賀　韓国原子力医学院　行政職
⑦張　元碩　韓国原子力医学院　行政職
⑧沈　琼錫　東南圏原子力医学院　放射線技師

追悼平和祈念館にて

第13回永井隆平和記念・長崎賞の候補者を募集

ナシムでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年に、原子爆弾により自らも重症を負いながらも被爆者の救護に挺身された永井博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しました。

この賞は永井隆博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ、国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を顕彰するものですが、令和2年は第13回目を実施予定です。

5月から候補者の募集を開始する予定ですので、本賞の候補者としてふさわしい方をぜひご推薦ください。

詳細については随時ホームページでお知らせします。

小中学校で出前出張講座を開催します。

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識を普及するため、長崎大学の先生方が小中学校へ出向いて講義を行う出前講座を実施いたします。平和と科学・医療に関する国際協力への興味・関心を促すことの出来る楽しい講座です。

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんに分かりやすく説明いたしますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。

講座メニュー	
放射線って何？－身近な放射線の話	
放射線・紫外線と私たちの健康	
長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査
	長崎原爆被爆者のこころの調査
測ってみよう放射線	

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）
〒850-8570　長崎市尾上町3-1（長崎県原爆被爆者援護課内）
TEL 095 (895) 2475　FAX 095 (895) 2578
http://www.nashim.org/